

## 痴漢事件

### 子ども事件への対策

私が小学生の頃の話。「声も出なくて：体が震えて何もできなかった」。夕方のニュースでこんな痴漢被害者の話を何度も聞いたことがある。普通に考えたら、そういうときは大きな声を出して周囲にいる人に助けを求めるとか、抵抗して犯人を追い払うとか、簡単に思いつく。家族で夕食をとっていたときも母が、「大きい声で叫んでとにかく逃げるんだよ。知らない人の家でもいいから入って行って助けてって言うんだよ」と、何度も私や妹、弟にもすりこむように言っていた。親の言うことに間違いはないと思っていた純粋でまじめな私は、「わかった!!!」と素直にその言葉を受け取っていた。

痴漢だけでなく連れ去り事件も同様に、危ないから気をつけて登下校しなければいけない、大勢で帰ってくることに耳にたこができるほど言われて、言いつけ通り私は数人で登下校していた。

下校というのは子どもにとっては疲れる仕事のひとつでもあるが、楽しい時間でもあった。男女二人ずつぐらいの四人組程度で下校する。帰る方向が同じならみんな帰るのが安全だし楽しいし。小学生も高学年にもなれば、恋の話が一番盛り上がる。

る。○○ちゃんは□□君が好きらしいよとか、△△ちゃんは☆君と付き合っているみたいとか、事実かもよくわからない話を毎日、毎日しながら過ごしていた。

### 人生における大事件

小学校六年生の夏休みに入る前日。例のごとく担任の先生から毎年ほぼ同じ内容のプリントを配布される。プリントを見ていくと、夜更かしせず早寝早起きをする、冷たいものを食べすぎない、宿題をきちんとやるなどと普通のこと書いてある。私から言わせれば、そんなこと言われなくてもわかっているからさつさと帰らしてくれと思いつつ、まじめな私は大人しく、当時冷房のない暑い教室で話を聞いた。やつとのことで先生のありがたいお話が終わって帰途についた。ついに夏休みに突入した。このときはまだ、小学生最後の夏休みが毎年のように平凡だけど平和なものとは程遠いものになるなんて、これっぽっちも思っていなかった。

夏休みも終盤に入った頃、私の人生において大事件が起こる。その日は、母の友達が家に来ていて、お菓子を買ってきてと、おつかいを頼まれた。家から一・五キロほどのところに駄菓子やお菓子を売っている店があったので、そこに行ってきたことだった。夏の暑い盛りの時期だったから、一秒でも早くおつかいをすませて冷房のきいた家に戻ろうと思いつき、自転車で行くことにした。もちろん、まじめにルールを守ってヘルメットをかぶった。

店に着き、店の裏側にある駐車場に自転車を止め、さっそく

買い物をした。店内は冷房がきいていて汗をかいた肌がひんやりと冷やされた感覚を覚えている。会計をすませた私は、店を出て裏の駐車場に行った。買ったものを自転車のかごにのせ、ヘルメットを再びかぶり自転車にまたがろうとした瞬間、うしろから抱きつかれた。ただ抱きつかれたのではない。あきらかに胸を触っている。いや、触っているというよりは揉みしだいている。

時間にしたら、ほんの十秒ぐらいのことだっただろうか。怖くて、怖くて一言も声が出なかった。たったの一言も。あれだけ母から、「何かあつたら大きな声で助けを求めろ」と言われていたのに。男は私から離れて、走って車に乗り込み走り去った。私はどうしていいかわからず、とりあえず店に戻って店員に震える声で私は何か言った。何を言ったか記憶が曖昧だが、「痴漢に…あつた…電話かしてください…」と、こんなことを言ったような気がする。当時は携帯電話を持っていなかったから、電話をかけて母に迎えに来てもらおうととつさに思った。

だが、いざ電話をして母の声を聞いたら、「今痴漢にあつた」と言えなくなつた。なんだかよくわからない話をして、「じゃあ、今から帰るから」と言って、家に向かうことにした。電話をかけたくれた店員は少し心配そうにしていたようだが、私はお礼を言つて店を出てもう一度自転車に乗った。今度はうしろを何度か確認しながら。店を出た時点で気温は高く暑いはずなのに、寒気がするような、言葉では言い表せない感覚に襲われながら帰宅した。私が帰宅してすぐに、お客さんは帰って行った。私の様子がおかしいことに母がすぐに気付いてくれて、「どうかした

の？」と近づいてきた。それと同時に私は声を出して泣きだした。

ただごとじゃない雰囲気を感じた母は、私を抱きしめてゆっくりなだめて何があつたのか話してごらんと促してくれた。私はひどくしゃくりあげながら痴漢にあつたことを話した。ひたすら泣いて落ち着いたところで私は寝てしまったような気がする。

### 交番での事情聴取

私が目を覚ましてから、母は私の担任の先生に電話をした。どうしたらいいかアドバイスをもらったようので、交番に行くことになった。交番では、「どんな人だったか覚えてる？」と聞かれたが、「痩せてる人」としか答えられなかった。数回聞かれたが、「痩せている人」としか答えられなかった。家に帰ってきてからだったか、母が、「ママちよつとやあらし(気恥ずかしい)かつたよ」と冗談交じりに言った。なぜかという、このときに対応してくれた交番のおじさんが太つた人だったからだ。言われてみれば確かに太つていたなあと、あとから思った。

交番で話しているときも、まだ緊張感から解放されていなかったのかも。しかも痩せた人というヒントだけで犯人が捕まるわけもない。最終的に、「すぐ近くにパチンコ屋があるから、パチンコで負けて、うさばらしにやったのかもしれない」と言われて終わった。あの当時は、「そうか…パチンコに負けた人がイライラしてやったのか…」と鵜呑みにしていたが、今になって冷静に考えると、パチンコのうさばらしとかいう、適当な予測を言

わられただけだったと感じた。対応自体は悪くなかったと思うが、所詮は痴漢事件で怪我もないし、服を脱がされたりもしていない。目撃した人もいない。こんなことでは警察も動きようがないといったところだろうか。

### それから私

それから私は、表面上は普通に元気に過ごした。だけど、私の中では、今までに思ったり考えたりしなかったことが心に生まれた。それは、「男はげがらしい、きたない、きもちわるい、所詮性欲しかない生物」。小学校六年生の女の子には、痴漢にあうということが早すぎたのだと思う。まだ男の子と付き合うとか、そういった類の経験がなかった私には、恐怖感が倍増したように思う。トラウマとまで言うかと大げさかもしれないが、自分のうしろに人が立つということが嫌になった。特に、大人の男。ひどいことをする人がごく少数しかいないことはわかっているつもりだったが、それでも嫌だったし、男はげがらわしいと思いつづけた。買物にでかけたら知らない男がたくさんいて、たまたま私のうしろに立った人がいると何かされないか、と疑ったり偏見のまなざしで見ている。

中学生の間も元通りになるまでの気持ちには戻らず、友達の子がふざけて、うしろから脅かしてきたときには、襲われたときに感じた「ビクン」という感覚を感じた。その男の子は、仲良くして何の害もない、ただのクラスメイトだったが、彼もやはり「男」だ。おそらく私の中に「男」は、たとえ仲良くしている

男の子でも完璧に信用できる生き物ではないと思いついで、あの種のマインドコントロールのようなものを自分で自分にかけていたのではないだろうか。事件以来、性別や男に必要な以上に敏感になっていたことは嘘ではない。

### 男性への恐怖心が薄らいで

高校生になって、かなり心が成長したおかげか、日常でびくびくすることはほとんどなくなった。やっと私にも男女の違いや、男の子がどういうことを考えているかわかるようになり、みんながみんな怖い存在ではないことがわかってきた。怖くないことがわかってくると、もつと知りたい気持ちが芽生え、「好きになる」とか「付き合う」ということに興味がわくようになった。あつという間に別かれてしまう結果になってしまったが、初めての彼氏ができて、またひとつ心が成長したように思えた。気持ちが通じ合っていることが、こんなに居心地が良いものだと思いついて、大人になった気分がした。

次にできた彼氏の存在が、痴漢にあったという事実を私の中で完全に過去のものにすることができた。彼とは、高校三年の終わり頃から二年ほど付き合った。この期間にいろんなところへ行ったし、旅行も何度かした。高校生のうちは外泊も許されないう私だったのに、泊りがけで旅行できたことは一生の思い出になった。

旅行のように、初めてのことを男性と経験することで、この人は怖くない、男性は怖くないと自然に思えるような、心に余

裕が生まれた。それから、普通のカップルのようにメールをしたり、食事に行ったり、週末には遊園地やショッピングにでかけて、すっかり事件のことなんか気にならなくなっていた。いや、気にならないわけではないが、この人は私を理解してくれて、私の味方でいてくれるという自信のおかげで、怖いものがなくなつた。

### 妹の痴漢事件

彼と別れてしまつて一年ほどしてからのことだった。痴漢にあつた事実を忘れたわけではないが、「過去」にすることができていた私に、痴漢を思い出させる事件が起こつた。四歳年下の妹が痴漢にあつて泣いて帰つてきた。

高校生の妹が泣くことなんて、めつたなことがない限りありえないことだったので、なんとなくだが、もしかして痴漢にあつたのではないかと思つていた。母があのとときの私にしたように、ゆつくりと妹をなだめて、「どうしたの？ 何か嫌なことがあつたの」と話すことを促した。やっと話し出した妹の口から、「足…触られた…」と泣きながら話した。このとき、私はまたなんとも言えない寒気のような感覚を感じるとともに、やつぱりか…と思つた。母は私にコンロの火を消させて、妹の肩をしばらくさすつて、涙をふいてやつていた。

私が痴漢にあつてから、妹が痴漢にあうまでのおよそ十年間、誰も私の痴漢事件の話を持ち出さずそつとしていたのに、ついに母が、「なんかうちの子は痴漢にあうね」と私の事件のことも含

めて言つた。この一言が私の心に重く感じた。母も忘れたわけではないことがわかつたし、もしかしたら十年もの間一言も発さないことで、私が忘れていくこと願つて触れないようにしていただろうか。母に確かめる勇気がないから聞いてはいないが、妹の件でも痴漢にあつたその日以来、話をしていない。ここには触れないで時間が傷を癒してくれるのを待つている母のやさしさがあるのかもしれない。

### 十年前の事件にこだわっていた私

私は、なぜここまでこの事件にこだわっているのだろうか。時間の経過とともに元気を取り戻したし、何事もなかつたような顔で過ごすこともできていた。それでも忘れずに今でも鮮明に覚えてるのは、痴漢にあつた年齢が一二歳と若すぎたことが原因のひとつだと思つた。

正直なところ、子供が痴漢にあうことは、他人からしたらただの痴漢事件かもしれないが、本人からしたら大事件で、その瞬間から景色がそれまでとは違つて見えるぐらい、灰色というか、かすみがかつて見えるように、それまでとは違う景色になるのだ。

世界が急に敵になつてしまったような、みんなが私を見ているような感覚さえ感じる。子供の心が形成されている時期に、被害にあうということは、その後の人生に大きな意味を与える、ということが私自身の経験でわかつた。

男という性を嫌い、憎み、もつと言うなら、性犯罪者は私が

この手で罰を与えられないだろうかと幼いながらに考えたこともあった。そうやって嫌って憎みながら生活を送ると、男への偏見がどんどん強まっていく。それでも心の成長とともに異性への興味も自然とわくようになってくる。この間で揺れるのも少々苦しかった。興味はあるのに、汚らわしい生き物なのではないかという不安もある。

同じクラスの男子を好きになっても、あ那时的男と同じオトコなんだと思ってしまう自分が見え隠れする。このように悩むのも、私の場合は中学校が終わる頃までだった。高校に入って、男子ハンドボール部のマネージャーをやって、毎日部員を近くで見て、話して、笑っていたら、異性も敵ではないと、ゆつくりではあったがわかってきて、怖さが減っていった。

今、この痴漢事件にまったくこだわっていないかというところではない。忘れることができるなら、それが一番楽だろうけど、そんな簡単に忘れることもできない。忘れていないからこそ、自分の身は自分で守る意識が高くなったと思う。これだけ前向きにとらえられるのは、私も大人になったからかな、と振り返っているところだ。

事件から十年経った今、私は母にまだ話せていないが、今はもう笑って話せるほど、過去の出来事にすることができたよと、ここに記す。